論　文　審　査　の　要　旨

博士の専攻分野の名称	博　士　（　学　術　）	氏名	笛吹　理絵
学位授与の要件	学位規則第４条第①・２項該当		

論　文　題　目

Close and Distanced Being: Human and Non-human Animal Boundaries at Tourism Landscapes in Japan

論文審査担当者

主査　教授　フンク・カロリン
審査委員　教授　淺野　敏久
審査委員　教授　奥田　敏統
審査委員　講師　張　慶在
審査委員　教授　張　峻屹（国際協力研究科）
審査委員　講師　中空　萌（国際協力研究科）

〔論文審査の要旨〕

本論文は，屋久島と宮島を事例に取り上げ，観光地における人間と非人間的動物(Non Human Animals, NHA)の関係をシカに視点を絞って論じるものである。論文は８章からなり，観光者アンケート，シカと人間の出会いをビデオにとって分析する観察調査，観光やシカの管理に関係するステークホルダー，生活でシカに関わる住民に関するインタビュー調査，参与観察という，複数の方法を組み合わせた研究の結果をまとめている。

第１章では観光に利用される動物とその倫理的な扱いに関する背景，研究の視点，目的と論文構成について述べた。第２章では先行研究を整理し，動物と観光の歴史について，研究視点の変化を踏まえ概観し，人間動物関係学の影響によりワイルドライフ・ツーリズム研究でも動物倫理に関する研究が増えたことを指摘した。また本研究のアプローチおよび枠組みとしてのエコフェミニズムの思想，ポリティカル・エコロジー論について紹介した。第３章では，予備調査として行った比較研究では同じ「野生」のシカでも奈良と宮島のシカの管理のされ方が異なることを明らかにし，「野生」という言葉の意味を理解することが必要であるということを指摘した。それに基づき，第４章では研究のアプローチと研究方法を詳しく説明している。第５章と第６章はそれぞれ宮島と屋久島におけるシカと人の歴史，観光地宮島におけるシカの役割，シカの管理とその問題および課題について明らかにした。その結果，宮島ではシカを「野生動物」として捉えるか否かで認識の食い違いが生じ，シカはその狭間に置かれていること，屋久島ではシカの個体数を減らすための駆除により，住民との間に軋轢が生じていることを明らかにした。第７章はシカが野生と捉えられる時，そこには空間的境界線および行動的境界線が引かれ，シカがその境界線を越えて人間の空間に侵入した場合，シカは不自然な存在となり，排他的な力が働く。その際，共通して「シカは悪者」というイメージを植え付けていた。しかし反対に，人間がシカの空間に侵入した場合，その空間は人間の空間となり，そこに不平等性があると指摘した。第８章は論文の内容をまとめた上で改めて人間により構築される境界線(Boundary)の課題を指摘し，観光空間における人間とNHAの関係をNHAの視点から，そして場所や文化的背景を配慮した検討が必要であることを強調した。

本研究は観光空間における人間とNHAの関係を取り上げ，先行研究の議論を踏まえたうえで観光に利用される動物への理論的な扱いについて初めて日本の事例を調査した論文として高いオリジナリティーを有している。資料と現地調査に基づいた分析を行い，調査方法をそれぞれの調査対象に合わせて適切に使用したこと，研究を進めるにつれて明らかになった課題に合わせて研究方法を展開したことも高く評価された。一方，一部の定義や一部の研究アプローチに関する説明が不足していること，回収した計量的調査結果を十分に解釈できていないという課題も指摘された。しかし，本論文は適切な研究方法に基づき境界線(Boundary)というコンセプトから人間とNHAの関係を解釈したことがワイルドライフ・ツーリズム研究における新たな理論展開につながり，この分野の研究に大きく貢献したことが審査員により特に評価された。

以上，審査の結果，本論文の著者は博士（学術）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

備考　要旨は，1,500字以内とする。